

第16回 京都御苑ずきの御近所さん

京都大学総長 山極 寿一様



総長になられて、今までの研究が どう生かされましたか？

僕が総長になった時、記者団から「山極総長の座右の銘は何ですか？」と聞かれ、「ゴリラのように泰然自若」と答えました。要するに、私は、大学執行部の経験もなく、総長の仕事がどういうことなのかも分かっていませんでしたので、ゴリラのようになってみたらちょっとは新しいものが見えてくるのではないかと思い、大学をジャングルと考えた訳です。ジャングルと大学とは非常によく似ています。ジャングルは陸上生態系の中で、一番生物多様性の高いところですよ。多様な生物がそこで暮らしている。各々が、それぞれのことをよく知っている訳ではなく、思わぬところで思わぬ出会いがある。つまり、—ジャングル—熱帯雨林の生態系は、多様性がその本質なのです。

大学も同様、非常に多様な学問分野の人たちが暮らしていて、それぞれがお互いを知っている訳ではない。大学というのは閉じている訳ではなく、社会や世界と通じて合っている訳です。大学だけでは自立できないのです。他に似ているところは、ジャングルが太陽の光と水が必要のように、大学も太陽の光と水に当たるものが必要なおところですよ。それは世論とお金です。このように非常に

構造的に似ているということで、ジャングルを上手く存続させるように大学を存続させるのが学長の役割だと思って経営してきました。つまり、ジャングルというのは支配者がいる訳でもなく、それぞれが生きたいように暮らす、やりたいようにやる。その中でお互い抑制しあったり、新たな出会いがあったりしながら、自分の行動・相手の行動・コミュニケーションを通じてお互いがコントロールしていて、それがスムーズにいくように学長は心掛けたいということで大変気持ち楽になり、そういうふうになってきました。結構、今までの仕事は役に立っているんですよ。

2年前に出版された『「サル化」する人間社会』 で一番伝えたかったことは何ですか？

僕は、最初に屋久島でニホンザルの研究をしていました。それからゴリラの仕事始めて、ゴリラとサルと人間という3つを対照させて進化を考えるとことをしてきました。すると、「サルとゴリラの違い」の方が「ゴリラと人間の違い」よりも大きいということに気づきました。人間はゴリラから受け継いだものがすごく多いんです。でも、文明に頼りすぎると『サル化』していきます。簡単に言うと『ルール化』していくということです。相

手の状況を考え、今の自分が置かれている立場を考えながら、その場に応じて判断していくのではなく、ある定まった関係（サルだと強い・弱い）に基づいて物事を判断してしまうようになります。その例として、「食物があったら強い者がとる」というルールがニホンザルにはあります。そのルールには「この状況では相手に譲るか？」とか、「自分が先にとってもいいか？」などを考える必要がないのです。強いか・弱いかだけで、誰がとるかを決めてしまいます。その『ルール化』に人間の社会もなりつつあるのではないかと思います。

人間がゴリラから受け継いだことは、「体の大きい・小さいだけに関わらず、状況に応じたお互いの関係が変化する中で、判断をする」ということです。相手にとらせてやるかわりに違うところで自分がとる、というような駆け引きが出てくる訳です。そういった駆け引きがあるのは、「相手の立場に立って物事を考えられる」ということで、いわゆる共感というものを利用しながらやることです。しかし、今は自分の幅を広げていくということが人間社会でなくなってきているのではないかと思います。その原因は、人間が自然と段々付き合わなくなって、自分でコントロール可能な機械や、機械のような人工物とばかり付き合うようになってしまったことだと思います。インターネットもその中の1つです。自分でコントロールできる、あるいはコントロールできないと止めればいい、潰してしまえばいい、そういう世界になり過ぎたのではないかと思います。自然は自分の思い通りにはならないもので、いつも意外なものが立ち現れます。僕が以前に研究していた屋久島やアフリカは森林です。森林は視界がすごく狭く、サバンナみたいに遠くを見通せる訳ではありません。自分の視覚に入ってきた時に、直ぐに相手とインタラクションしなければなりません。そういう直観的な対応を迫られるような場所なのです。人間はそういう環境の中で文化を創ってきました。要するに、いい加減でもよく、間違えなければいいのです。ただ、決定的に間違えてしまうと大変なことになります。だから、「間違えなければいいけど、正解でなくてもいい」という感じで、割と隙間を残しながら野生動物や自然と付き合ってきたと思うんですね。そういう付

き合い方は、自然と付き合えば付き合うほど身に付けることができます。だけど、機械や自分で操作が可能なものばかり付き合っていると、そういう心構えを忘れてしまいます。つまり、「正解でなくてもいい、間違えなければいい」というのは、さっと相手の立場に立てるとのことなのです。物事をいろんな視点から眺めることができるということは、自分を抑制し、欲望にかられて、何もかも自分の手に収めたいという訳ではなく、少し引いて眺めてみるということです。そういう考えが段々と忘れられているのかなという気がします。

『「サル化」する人間社会』とは、自分が中心になっていくということです。象徴されるのが、「自己実現を目指せ」、あるいは「自己責任」という言葉に表れているように、常に『自己』が中心になっています。でも自分というのは、他の自然や人間たちの中にある1つに過ぎない訳です。自分のやっていることは、他の人たちにすごく影響すると同時に、いろんな身の回りで現れていることを自分で受け止め、その中に調和を求めていかなければなりません。

『ルール化する』というのは、まさに「自分中心にルールさえ守っていれば、別に他人に迷惑はかからないでしょ」という考え方なのです。相手の立場に立たなくていいという話なのです。そういう風に段々社会が閉鎖的になっているのではないかと思います。ニホンザルはすごく閉鎖的な社会をつくっていて、群れを一旦離れたらなかなか戻れないし、他の群れに入るのも大変です。だから、群れの中だけで成立する秩序やルールがあります。一旦離れてしまえば、同じ群れを構成するメンバー間のネットワークから外れてしまうので、仲間はずれになります。しかし、人間はそうではなく、1日にいくつかの集団を渡り歩けるような融通性を備えていて、その場その場で自分を変えられ、受け入れてもらえるような許容力を持っているのです。けれど、そういうものがどんどん失われていき、ルールという集団の中で成立する合意から外れてしまえば、ネットワークから外れると同時に受け入れてももらえなくなります。そんな社会が今、できつつあるのではないかと思います。どんどんみな小さくなっている訳です。

今の社会は、インターネットやフェイスブック、スマホを使っていて、いろいろな人たちと付き合っているように見えて、実際は信頼できるコミュニティのサイズはどんどん小さくなっており、わずか数人と信頼関係を構築できているに過ぎないのかもしれない。昔は無条件で信頼できる人が近所にいて、親族もいて、そういう仲間たちが連絡を取り合わなくても自分を守ってくれていたし、自分も信頼できていた訳ですよ。しかし、目の前にいる人がどんどん信頼できなくなってきました。信頼や絆がどんどんなくなっていき、ルールだけになっています。それが『「サル化」する人間社会』で言いたかったことなのです。

人間は、もっと五感を通じて付き合うべきではないのかなと思います。人間は、サルの子孫であり、そもそもサルと共通の祖先を分かち合っているのです。人間の五感というのはサルに似ている訳です。つまり、視覚が非常に優位なんです。真実は視覚によって判断をします。だから、現行犯が一番分かりやすく、誰かが言っていることだけでは決定的な証拠にならないけれど、やっているところを見たという話なら誰もが納得できます。視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚という順にリアリティーが薄れていく訳ですが、信頼はその逆の方向で厚みが増します。触覚、即ち手で触れるということが一番信頼を創りやすいし、「おふくろの味」や「一緒に飯を食った仲間」などというように、味を共有し合った仲間は親しくなれます。また、「匂い」でいう「お母さんの匂い」や「お茶の間の匂い」、あるいは「自分が好きな部屋の匂い」など、そういった匂いによって、親しいという感じが記憶の中に残ります。視覚だけで繋がり合った仲間は割と安っぽいし、信頼されることにはなりません。つまり、リアリティーが分かりやすいのは、騙しやすいものでもあるのです。リアリティーから離れていけばいくほど、信頼が籠もるとというのが人間の不思議なパラドックスで、今の時代はそういうものを多用して、人間の持っている身体性に基づいたコミュニティを再構築しなければ駄目なのではないかと思えます。

自然から離れていくことによって、変化に対する許容性がどんどん薄れている訳です。機械とかインターネット

トを通して付き合っていると、何でも繰り返しができます。腐らない、変化しない、また元に戻れるという、そういう論理になってしまいます。でも、自然は常に変化しているし、死に絶えるものだし、腐るものだし、そういうことを前提にして付き合っていくことを人間は忘れて始めている訳です。例えば、「失敗して動物を殺したら、また買えばいい」など、命の大切さというのが分からなくなっていると思うのです。一期一会と言いますが、出会いや付き合いというのは、その瞬間の出来事で決して繰り返されないものです。それを持続させるためには、どういう態度で接しなくてはいけないかということ、一瞬一瞬自分というものを大切にきちんと出していかなくてはいけないということを忘れてはいけないと思います。自然と付き合えば、自ずと身に付くものであり、何かを守り育てる体験を、子どもたちも大人もどこかでやった方がいいと思います。そうしていかなければ、人間味が失われていくのではないかという気がしています。

『「サル化」する人間社会』の中で、コドモオスと一緒にハゲニアの大木の洞で雨宿りされたことが紹介されています。人間に抱かれて眠った野生のゴリラはタイタスが初めてだと思うのですが、どんな感じでしたか？ また、後年、タイタスと再会され、彼が総長を記憶していたことは大変感動的でした。再会の際の挨拶「グッ、グフォーム」はどんな声（声色）でしたか？

「グッ、グフォーム」。低い、ゲップのような声です。腹から出し、口先では出さない。そういう声です。ゴリラは腹が大きいから、低くて重たい声が出ます。なかなか真似できませんが、それが挨拶音でいろいろな時に出す声です。

ゴリラの体は硬そうに見えますが、実はグニャグニャです。お腹なんてブヨブヨです。でも、そんなに脂肪がある訳ではなく、子どもでもお腹が大きいです。でも、それがドサッと乗ってきたのですごく重たかったです。おそらく80kgくらいあったのではないかと思います。ニホンザルは雨に濡れるとガリガリに見えるのでゴリラもそうだと思っていたのですが、実は違います。ゴリ

ラは毛がムクムクしているから大きく見えるのではなく、手首なんてとても太く、実際に大きいのです。毛は立っている訳ではなく、寝ているので、身体の大きさは濡れた時でもそんなに変わりません。その時は、ゴリラが寝ちゃったので仕方がなく、つねってみたり腹を押ししてみたり手首の太さを計ってみたりしたのですが、全然起きませんでした。あれは、わざと眠ったのだと思います。僕を試したのです。ゴリラは結構意地悪なので、僕が困るだろうなっていう感じのことをしてくる訳です。遊びの1つですけどね。私が「どけよ」ってやっても、どかなかった訳です。そういうのはタイタスだけじゃなくて、大人のメスゴリラにもやられたことがあります。下が草でクッションになっていたからそんなに重さは感じなかったのですが、それでもこっちは身動きできませんから。

現代人が「サル化」しないためには、何が大切ですか？

もっと五感を通して人間と付き合うようなことをした方がいいと思います。例えばコンサートに行ったり、身体を使うスポーツをしたり、文字情報とか声や視覚だけではなく、一緒に御飯を食べたり、接触しあうスポーツなどで付き合う方がいいと思います。

今、人間は脳と脳で繋がろうとしています。でも、人間の進化の大部分は身体と身体で繋がりが合ってきて、それが五感を通じて繋がりが合うということなのですが、脳と脳で繋がりが合っても信頼感はできないのです。それはずっと長い間、身体で同調し合いながら繋がることによって、お互いに生きている実感というのを共有してきたので、頭だけで繋がることはなかなかできません。頭の中で繋がれば、子どもはAIと一緒に、自分の知識を誰かに預けることになります。やはり、身体で繋がりが合うことを通じて、人間が本来持っている、生きる力や生きる喜びを互いに刺激し合うことが必要だと思います。

山極総長のこれまでの研究を通して、驚かれたこと、興味深かったことをいくつか紹介頂けますか？

ガボンの国で、“ドド”と名前を付けた子どものゴリラがいたのですが、3歳の時に片腕を失ってしまいました。お母さんゴリラも死んだのかよく分かりませんが、いなくなっていました。3歳というと、まだお乳を吸っている頃で、乳離れを漸くし始めたくらいの時です。腕は何かの事故、あるいは他のゴリラに襲われて失ったのか分かりませんが、罨ではないようでした。右手が肘からなくなったので、もうこれは駄目だと思ったのですが、お父さんゴリラや年上の子どもたちや他のメスたちにいろいろ世話を焼いてもらい生き長らえました。でも、右手が使えないので木に登れません。暫くの間は他のゴリラが木に登って落とした葉っぱやフルーツを食べて大きくなっていったのですが、ある時、自分なりに工夫して木に登ることを覚えました。木の上に登って、両手を使えたら片手で身体を支えて餌を採れるのですが、支えることができないので、二足で枝の上に立ち、取った物を肘までしかない腕で挟み、歩いて採るということを始めました。自分で考えたのです。他にモデルがないので真似ができない訳です。自分で年上の子どもたちや年下の子どもたちのやることと違うことをやり、同じ目的を達成することに成功したのです。そうやって木登りをしながら、他の子と引けがとらないくらいの採食、餌採りを覚えて大きくなっていきました。未だに生きています。これは大きな驚きで、すごいなあと思いました。腕をおとさなくても、お母さんゴリラがいなくなったら死んでしまうことが多いのです。チンパンジーなら死んでしまいます。お父さんゴリラや年上の子どもたちがすごく面倒を見てくれたということと、生きる力ですよね。自分が障害を負ったとしても、その障害を乗り越えて他のゴリラたちと同じ目的を達成するように行動を変えたのです。自分だけの技術を身に付けたということです。ゴリラってすごいやつだなと思いました。

もう1つゴリラがすごいところは、悲嘆に暮れないところです。人間だったら、「もし腕があったら」とか、

あるいは、「あんな事故が起こらなかったら」というふうに、過去を振り返って自分の他の可能性と比べて悲嘆に暮れることがよくあります。他のチンパンジーの研究からも言われているのですが、自分が障害を負っても決してそれを悲しみません。そこからまた始まるのです。それが自分に与えられた世界だということをその場で納得してしまうのです。これは、人間が見習わなければいけないと思うのです。人間というのは想像力が豊かすぎて、自分が成り得たかもしれない可能性と今の自分をついつい比べてしまうものです。それで余計な悲しみに暮れます。もう少し明るく考えられないものだろうかということをごりらから学びました。人間の子どもは大きくなった時の自分というものを思い浮かべて、それになろうと一生懸命努力をし、なれないとイライラしたりするけれど、ごりらにそういうことはないです。その分、想像力が弱いということになるのかもしれませんが、自分が想像していたものと期待外れになることがないので、イライラせず、毎日が楽しく感じられるのではないかと思うのです。あるがままに生きるという態度を人間も見習うべきだと思います。

山極総長の思い出の中で、京都御苑にまつわるものはありますか？

僕は、京都大学理学部生物学専攻で、いつも春に野球大会を京都御苑のグラウンドでやっていました。結構うちの研究室は強くて、優勝カップを手にしたことも何度かあります。学生の頃もやっていましたが、1998年に教員になって京都に戻ってきてからも学生たちと一緒に参加して結構活躍していました。また、御苑は散歩道にもなっています。今はちょっと寒いので散歩はしないのですが、近所なのでよく早足で歩いたり、走ったりしています。僕の子どもの頃の遊び場は東京の一橋大学の構内でした。あそこもグラウンドがあり、藪があり、シイやクリや雑木林があって、そこで昆虫採集やターザンごっこをしたり、秘密基地をつくったりというのが私の遊びでしたので、こういうところは大好きです。御苑は植生が違い、マツが多いですが、藪はなく下生えが少なく

て歩きやすくなっています。

京都御苑で好きな場所、好きな時期などありますか？

全体的に気に入っています。今は子どもではないのでとてもできないですが、ターザンごっこができそうなマツなどがあり、子どもだったら遊べる場所だろうなと思います。あとは、宗像神社、白雲神社といった霊的な雰囲気を感じられる場所があって、その辺りは彷徨い込んだことが何度かあります。走ったり歩いたりしていると、別の時代に紛れ込んでしまうのではないかという気がすることがあります。特に白雲神社付近ですね。この間ビックリしたのは、京都御所の北東に位置する猿ヶ辻の角が切つてあるのを知ったことです。鬼門を避けるために、角を切つていて、しかも猿が居るんです。猿の彫刻がかけてある。こんなことをするのだと思って驚きました。それだけ御所や町は神様とか方陣などに合わせて造られているのですね。

御苑はなんとなく昔の暮らしを想像できる場所です。幻想かもしれませんが、京都って源氏物語をはじめとする小説によって、人間関係や人々との付き合い、衣装などを感じられる描写があって、それが未だに生きています。庭や物に残っている訳です。人々自体はどんどん変わっていますが、風景、特に植物や道、建物などにそれが残っていて、そこに^{ひとけ}人気を感じます。歴史の厚みというのか、ここに千年前に誰かが衣装を着て歩いていたんだと。昔は靴がなかったので、“ぼっくり”で歩いていたんですね。そういうことが頭に浮かんできます。森見登美彦の世界というか、ちょっと霊的な気分になります。御所は特にそういう気がします。

また、僕のお気に入りの一番好きな場所は、梨木神社の西側の道のところ。樹幹が覆い被さっていて、春から夏にかけて樹木の勢いがすごく感じられる場所で、夏になると特にすごいです。何時間でも佇んでいられそうな気がします。屋久島とちょっと似たところがありますね。クスノキやいろんな木があって、まさに照葉樹林です。御苑の南側はマツが多くて、モモやウメなどの落

葉樹が多いですね。なんせ屋久島で仕事をしていたものですから、どうしても照葉樹林がお気に入りになってしまいます。

京都御苑の今後について、御意見など ございましたら自由にお聞かせください。

義理父は庭に餌箱を置いて鳥がやって来るのが楽しみな人でしたが、近所にマンションができて風向きが変わってしまい、渡り鳥が来なくなってしまいました。そういう所が各所にあります。渡り鳥がどうやって渡ってくるのかは正確には分からないのかもしれませんが、変わっていない場所があるのはすごく安心できるので、毎年やってくるのだと思います。でも、街中はどんどん区画整備や高いビルが建ったりして、そういう場所が失われています。私の家の周りもどんどん駐車場などになっています。京都は人間だけのためではなく、いろんな動物にとっても大切な場所です。特に鳥にとっては。ですから、御苑の存在は大きいと思います。皇居も同じですが、御苑は固有種が残れる広さを持っています。いくら植物が変わらないといっても、ある程度の広さがないと生き残れません。御苑ぐらいの広さがあれば、かろうじて固有種が生き残れる可能性があります。それから鴨川が近いですね。鴨川と御所という関係が、鳥や水の関係が必要かもしれないと思っています。京都の水系は、いろいろ時代的に変わりましたが、鴨川は残っています。その関係で京都に残っている植物も多いのです。そこを御苑という大きな避難所で支えています。バッファゾーンかもしれません。ここがなくなったら、鴨川だけになってしまいます。

海外の聖地といわれている偉い人が住んでいる場所はギシギシに門や塀などで固められていて、城塞になっている所が多いです。それに比べてここは京都の象徴というのか、日本の統治の特長かもしれませんが、大層な門がなく誰でも入れます。つまり西洋のような武力衝突がなかったということですね。特に京都の御所の形というのは平安からある訳です。平安時代は稀に見る戦いのない時代です。それを象徴しているのが今の御所かなと

いう気がしていて、そういうところに天皇が住んでおられたというのは、それはずっと平和の象徴として残しておく価値があると思います。このままオープンな感じの御所を残しておいて頂いて、市民が気軽に足を運べるという場所にしてもらいたいなという気がします。

2017年2月10日インタビュー

聞き手：田村省二、山本昌世

○山極 寿一さまプロフィール○ 1952年、東京都生まれ。75年京都大学理学部卒業。80年同大学院理学研究科博士後期課程単位取得後、退学。87年理学博士取得。以後、ルワンダ・カリソケ研究センター客員研究員、日本モンキーセンターリサーチフェロー、京都大学霊長類研究所助手、京都大学大学院理学研究科助教授を経て、2002年に同研究科教授に。2014年10月から京都大学第26代総長に就任。環境省中央環境審議会委員、日本学術会議会員、河合隼雄学芸賞選考委員などを務めている。主な研究分野は、人類学、霊長類学。ゴリラ研究の第一人者。著書に『「サル化」する人間社会』（集英社インターナショナル）、『家族進化論』（東京大学出版会）、『京大式おもしろ勉強法』（朝日新書）、『ゴリラ』（東京大学出版会）、『暴力はどこからきたか』（NHKブックス）他がある。